

安楽死を許容する

医師は生命を救う事が唯一の究極の任務であるとして、安楽死を許容しない考えがある。病んだとき、ひとの全員が医師を求めているわけではない。求めなかったひとたちもいて、その人たちは自らの仕方で意識の終焉を迎える。終焉の迎え方はひとさまさまであろう。

こんにち、わたしたち人類は、個々の人間を生物として取り扱う医学という術を創出して、その術の代行者として医師を持った。だから、医学を使用する資格は医師を求めなかった人も含めて人類の全員にある。人類の一員ならば如何なる時であっても医学という術を使用する資格はある。たとえそれまで代行者を用いてその術を使用してこなかったとしても、意識の終焉に際して医師を自らの代行者として指定する事ができる。ここで問題にしているのは資格と権利であって、医師を指定する際の運用問題ではない。

生命が無限ではないことを忘れてはならない。命を救うことが医師の唯一の目的とするなら、洋の東西を問わず医師はただの一度も目的を果たしたことはなく、今後もけっして目的を遂げることはない。医学に永遠の生命を求めるならば、医学はこれまでも今後も求めに応じることはない。

死に行く経験は、他の誰でもないその人だけの経験である。望むならば安楽死を医師に求めることは、医学を築いた人類全員の権利である。

(改；NHK フォーラム 生命倫理 1998.05)